

石坂晴奈 サービスインテリジェンス研究コミュニティ リサーチアシスタント
 諏訪さゆり 西村拓一 押山千秋

何ができるか

特徴 マニュアル等には記載されにくい**ケアの根拠や目的**が明確になる

役立つ場面 介護に困った場面で検索・参照できる

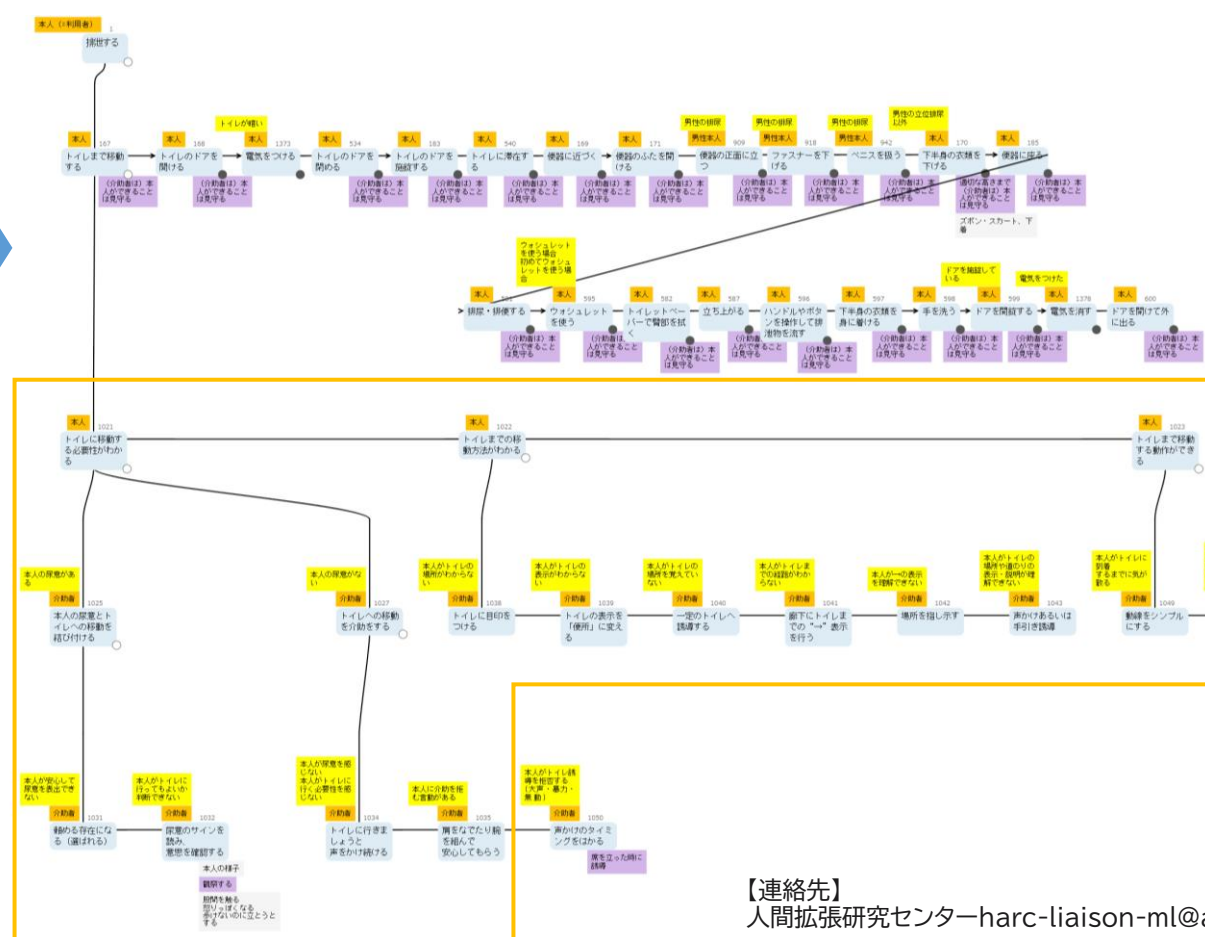
従来の知見・マニュアル等

移動	各行為についてケアが難しく た生活障害の具体像	その生活障害にどのようなケア（介助） をしたら上手くいったのか
	トイレの場所がわからない	トイレの表示を「便所」に変える。廊下にトイレまでの“→”表示を行う。
		場所を指し示す。声かけ（オシッコですか？手を洗いにいきましょうかなど）、あるいは手引き誘導。
		トイレに目印をつける。動線をシンプルにする。
		トイレに行きましようとして声をかけ続ける。印をつける。
		「便所」と貼り紙をする・一定のトイレへ誘導する。 ／肩をなでたり、腕を組んで安心してもらう。
	頼める存在になる（選ばれる）。尿意のサイン（股間を触る、怒りっぽくなる、歩けないのに立とうとするなど）を読み、意思を確認する。	
トイレ誘導の拒否 （大声・暴力・無動）	声掛けのタイミング（席を立った時に誘導など）をはか る	
立ち上がろうとしない・バラン スが取れない・歩を進めない	二人介助で立位のバランスを取ってから歩を進めるよう介助。	

“構造化”するときに追加した情報

誰の行為？ → 本人主体の表現へ
 どのときに？ → 障害されている可能性のある認知機能を表現
 どのように？ → ケアの詳細をわかりやすく提示

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2109 の支援を受けたものである。この成果の一部は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED)の業務委託(20us0424001h0001)、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の委託業務(JPNP18002)の結果得られたものである。



【連絡先】
人間拡張研究センターharc-liaison-ml@aist.go.jp